

ガンゲイル・オンライン route H^L

ハープatハイスペック雑魚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

GGOの世界で比企谷八幡（ハチ）が大暴れ！タッグを組むのは、みんなお馴染みレ
ンちゃんです！

目次

プロローグ	1
1章 first contact \sqrt{A}	4
1章 first contact \sqrt{B}	8
2章	13
3章 University days	18

プロローグ

「やつほう、みんな！フェイタル・バレットやつてる？・・・え？やつてない？・・・あ、そう」

嘘嘘、しよげないでレンちゃん！

注意

この作品にはキャラ崩壊が含まれています。苦手な方はブラウザバック推奨です。また、八幡ファンもブラウザバック推奨です。注意はしたよ？

序章

男は周りを見渡した。見渡す限りデザートピンクの砂漠である。所々に隠れられるほど

大きな岩が散らばっている。男はその一つに隠れている。

ークリア

男の周りに人が隠れられる岩は無く、近くても1800m先である。男は周りに敵が居ないと分かり、ホツとして銃をおろす。男が手に持っているのはAK47。言わずと知れたアサルトライフルである。

「へっ、ここまで来れば狙えねえだろ」

男は今、スナイパーに狙われていた。仲間はみんな殺された。

「・・・装備をストレージにしまってログアウトするか」

と言つても、男が不利なのは変わらない。なので、男は装備をストレージにしまってログアウトすることで・・・男のアバターはしばらく残り続けて、殺されると経験値は減ってしまうがレア武器のランダムドロップだけは防ぐことが出来る。

—どん。

何かが後ろに当たる音がした。言うまでもなく銃弾が当たる音だ。隠れている岩に当たつたらしい。

「嘘だろ!? 対物ライフルでもここまで届かないだろ!？」

男は狼狽する。いくら、対物ライフルでも、有効射程は1500mほどだ。しかし、さっきの一発で岩には大穴が空いた。明らかに、射程範囲内だ。

「くそッ! どうなってやがんッ・・・ガッ」

そこまで言つて男は急に首をもたげた。名も無きGGOPレイヤーご臨終のお知らせ。

「うへえ。相変わらず、その銃エグいね」

そう呟いたのは上から下まで全身を砂漠と同じデザートピンクに包んだ身長150

c mにも満たないチビだ。スリングで肩にかけているFN社製P90までピンク色だ。そのと年には、身長160cm程度の男がいる。黒髪、黒目で目は死んだ魚のような目をしている。

彼が手に持っているのは「バレットM82A1」という対物ライフルだ。作動方式はボルトアクション式ではなくショートリコイル式。有効射程は2000mもある。チート銃だ。

「今ので、全員だ。どうやらお前の出番は無かったみたいだな。レン」

「そうみたいだね。優秀なハチさんのおかげだね」

レンと呼ばれたピンクの少女が答えます。

「さて、装備を回収しに行くか」

一方、ハチと呼ばれた男はレンの皮肉を含めた言葉を無視します。

「はあ、了解」

レンはいつもぶれない彼に少し呆れました。

1章 first contact√A

比企谷八幡が小比類巻香蓮という女性と出会ったのは大学の学食でした。彼女は一人、大学名物デカ盛りカツカレーを食べていました。

八幡はその隣に腰を下ろしました。特に理由があつたわけではありません。ただ、そこしか空いていなかったからです。彼女も別に気にした様子はありません。八幡も別に気にすることなく「キャベツ定食く焼き肉ソースあえく(160円)」を食べ始めました。ちなみに、この学食で一番安いメニューです。

しばらくするとカツカレーを食べ終えた香蓮が席を立った。立ち上がると183cmという高身長のためかなり目立ちます。そのため、八幡も一瞬彼女に目を向けてしまいました。彼女は八幡の視線に気付いたのか八幡に目を向けた。しばらく見つめあう状態になっていたが、香蓮は少し不機嫌そうな顔をしてそっぽを向いてトレイの返却口に歩いていきました。

「?俺なんかしたか?」

その質問に答える者は誰もいません。

「・・・あつ」

それでも誰かいないかと探しているうちに気付きました。ストラップが落ちています。ピンク色の。おそらく彼女の物です。そして、拾い上げてみるとそれが八幡のよく知っている「モノ」だと気付きました。

「・・・P90?」

ベルギーのFN社が開発したPDW（個人防衛火器）。弾層を含めて約3kgと軽量で、装填弾数は50発。5.7×28mmという特殊な弾を使います。

「・・・」

なぜ、女性がそんな物騒なものをストラップに？なんて疑問も出てくるが八幡が驚いたのはそこではありませんでした。

「・・・ピンクのP90?」

アミュスフィアというハードを使用したVRゲーム「ガンゲイル・オンライン」通称GGO。

荒廃した近未来を舞台にしたMMORPGだ。そこには現実に存在する実銃が登場し、ガンマニアはごぞつてこのゲームをプレイしています。かくゆう比企谷八幡もこのゲームのプレイヤーです。

スクワッドジャムーGGOで行われた小さな大会だが、色々と話題になっている。

というのも優勝者は、二メートル越えのアバターが多いGGOにおいて珍しい150

cmにも満たない少女だったのだ。その出で立ちからピンクの悪魔と呼ばれています。そして、ピンクの悪魔が持っていたのがピンクのP90だ。

「・・・まさかな・・・」

八幡もスクワッドジャムの映像を見たが、どうも小比類巻香蓮と映像のピンクの少女が一致しません。主に身長が・・・

「・・・ファンなのかな？」

単なる偶然か・・・、それともピンクの悪魔のファンか・・・。

「ねえ、それ、わたしの何だけど？」

比企谷八幡は肩をビクつかせました。それはそれは他人が視認できるくらいに肩をビクツとさせました。振り向くと小比類巻香蓮が立っていました。長身なので不思議と威圧感があります。

「あ、ああ・・・これか？」

八幡はおそるおそるピンクのP90を持った右手を差し出します。

「・・・そつちじゃない」

間違えた。こつちは箸でした。慌てて、右手を差し出します。

「ありがと・・・」

小比類巻香蓮は差し出された手からストラップをひったくりました。

「それじゃ・・・」

それだけ言って彼女は回れ右をして去っていきました。
「・・・まあ、いいか」

比企谷八幡は今回のことを気にしないことにしました。

1章・first contact√B

ハチがレンという少女に出会ったのは、「天城」というガンショップでした。

ハチは店の奥のスペースで休憩をしていました。ハチはここでバイトしているのです。リアルでは何度もバイトを辞めて、あるいはクビになっていますが、不思議とここはハチにとって居心地が良いのです。

「やあ、ハチくんおつかれ」

店主のカイルです。ほっそりとした身体（身長が高いのでそう見えるだけで意外にガタイはいい）にメガネの優しい雰囲気をもとった青年です。しかし、リアルは40を過ぎた、趣味筋トレのダンディーなオジ様です。ちなみに既婚者。「天城」は彼の本名から来ています。

「美味しい柏餅が手に入ったんだ。どうだい？食べていくかい？」

カイルは丁寧な口調で言いました。

「ありがとうございます。あとでいただきます」

ハチも丁寧に頭を下げました。

「分かった。じゃあ……ここに置いておくよ。……それは、SJの映像かい？」

ハチが見ていたもの指差して聞いてきました。

「ええ、少し気になることがあって……」

そのとき、店の入り口から鈴の音が聞こえました。つまり誰か客が来たということです。

「いらつしや〜せ〜」

ハチは立ち上がりレジに向かいます。

客は身長が150cmにも満たないチビでした。モスグリーンのポンチョを頭から被っています。命名、ポンチョさん。

ポンチョさんは銃が飾ってあるショーケースの前に立ち、一心不乱に何かを探し始めます。そして、お目当てのモノが見つかったのか目を輝かせて、「おじさん！」とハチを呼びました。ソプラノ調の女の声です。

（いや、おじさんって〜）

ハチのアバターはカイルより幾分か若く、十代に見えるのですが……。カイルがクツツ、と声を出さずに笑っています。

「何か気に入るものでもあったか？」

イラついたのでハチはタメ口で言いました。しかし、ポンチョさんは気にした様子もなく、

「おじさん！そのP90チョーダイ！」

と言いました。

（だから、おじさんじゃねえ）

もちろん口にはしません。その代わり少しやり返しておくことにしました。

「りよーかい。・・・ピンクに塗るか？」

そう言うと、ポンチョさんがピタッと動きを止めました。

「・・・いい、いえ大丈夫です。ピンクの悪魔とか全然分かりませんから、わたし」

誤魔化すの下手すぎませんか？

「・・・お前みたいなのはここにやそうそういないぞ？」

すると、ポンチョさんはうつむいて黙ってしまいました。正体がバレて焦ってるのでしょうか？それとも、チビと言われて傷ついているのでしょうか？

「・・・もう一回」

「は？」

「・・・もう一回言って：：！」

否、チビと言われて喜んでいました。

「・・・」

ハチはポンチョさん改めピンクの悪魔から少し距離を置きました。それに敏感に反

応じたピンクの悪魔は正気に戻り、誰にも言わないでね？つと違ってモスグリーンのポンチョを脱ぎました。ピンクの悪魔をピンクの悪魔たらしめる淡いピンクの服装です。

「安心しろ。誰にも言うつもりはない」

そもそも相手が居ません。

「……比企谷君。貴方はどうしてそういうやり方しか出来ないの？」

ハチは何かを振り落とすように首を横に降ります。ピンクの悪魔がキョトンとして首をかきげます。

何でもない。つと違ってP90を手に取り、レジまで持っていくきます。そしてP90の前で左手の親指、人差し指、中指をスライドさせて広げます。すると、名前、装填弾数、使用弾丸など様々なステータスが書かれた半透明の板が出現します。公式の名前はありません。もっぱら、ステータスやメニュー画面と呼ばれています。

その中から「COLOR」の項目を選び、その中から「PINK」を選びます。すると、P90がポリゴンへと変わり再構築されていきます。そして、淡いピンク色になって返ってきました。

「はい」

ハチがP90を手渡すと、元ポンチョさんはそれを受け取り飛びつきりの笑顔を浮かべました。その間にカイルの口座に決して安くないクレジットが振り込まれました。

「ありがとう！オジサン！」

ハチはピンクの悪魔を軽く叩きました。

「オジサン言うな。俺はハチだ」

たいして痛くないだろうに、ピンクの悪魔は頭をさすりながら、「ゴメン、ゴメン」と言いました。

「よろしく、ハチ…さん？」

「さんはいらん」

「わかった、ハチ。わたしはレン。よろしく」

そう言って差し出された手を少し悩んでから握り返しました。

「それじゃ、もう行くね！またどこかで会えたらそのときは…そのとき！」

レンは店のドアを開けながら言いました。カイルが「ご鼻屑にく」なんて言ってます。

「さて…ハチくん。柏餅食べる？」

レンが出ていったあとカイル聞いてきます。

いただきます。とハチは答えました。

”first contact” closed.

to be continued next chapter.

2章

(ブザーのなる音)

大変長らくお待たせしました。これよりガンゲイル・オンラインを上映いたします。最後までごゆっくりと御鑑賞下さい。

2010年、人類はラグランジュ・ポイント5に、オニール型スペースコロニー「BEYOND COAST」(ビヨンド・コースト)を完成させ…。え? 台本が違う? 困るよ…。本物は? え? 今探してる? オイオイ…。あつ、失礼したね。オレはジャナサン・イングラム。オールドル・A. でネゴシエーター紛いの探偵をやっている。今日はナレーションという形で皆と一緒にこの作品を見ていこうと思うんだが…。お、来たね。では僭越ながら…。「ハチとレンが再開したのは全くの偶然でした…」

2章

ハチとレンが再開したのは全くの偶然でした。

ハチはその日、PKに出ていました。地べたに這い、砂漠に身体と頭を埋め銃身の先が少し出ている状態でした。まるでヒラメです。

一方のレンもその日一人でPKに出ています。夕日のように赤い太陽に照らされて、ピンク色に反射する砂漠が彼女の待ち伏せを手助けしています。

先に見つけたのはハチでした。スコープで探っていたところ、太陽に反射してレンの腕時計が一瞬光ってしまいました。

ハチはすぐにそれがレンだと分かりました。あんなにピンクでミニマムなのはレンしか居ません。ハチは最初レンを撃とうとしましたが、すぐにやめました。向こう側から四人組が来たからです。全員男です。

一番前に居るのはスキンヘッドの大男。頭にサソリの刺繍をしています。武器はM16A3です。

二番目はハンサムな顔をした長身の優男です。ちなみに彼のリアルは富樫慎二という冴えない社会人です。M24スナイパーライフルを肩に掛けています。

三番目は小柄な青年でした。特徴は……特にありません。特徴が無いのが特徴です。武器はMP5です。

四番目はグラサンを掛けた髭面の男です。武器はスパス12。ショットガンです。

距離はレンから見て約5km。ハチからは5kmと少しです。ハチはすぐに標的を変えました。2km地点でようやくレンも気付きます。

残り1km。ハチのM82A1にとっては既に射程範囲内ですがまだ撃ちません。

残り三〇〇、二五〇、二〇〇mになってようやくレンが飛び出しました。レンはまず、スキンヘッドを撃ちました。サソリを穴だらけにしました。

しかし、彼等もGGOPレイヤー。レンが飛び出したのに即座に反応して、銃を構えます。

最初に撃つたのは、小柄な青年でした。MP5は軽いですからね。しかし、八幡はそれを放置して一番後ろの髭面の男を狙いました。近距離ではスパス12の方が脅威だと判断したからです。銃の12・7m弾は狙い変わらず彼の持つていたスパス12を貫通して、お腹に当たり上半身と下半身に二つに分けました。スパス12は全壊判定を受けてポリゴンへと変わり散っていききました。

一方、レンはMP5の9m弾をいくつか受けましたが、それはレンのHPを削りきるには至りませんでした。青年の後ろに回りながらP90を連射。弾の切れたP90を後ろにやり、ナイフを取り出して、優男の首に突き立てました。彼は昨日失恋したばかりでした。

全てが終わるのに一分とかかりませんでした。

全員が死体になったのを確認してハチは銃をストレージに戻しました。そして、両手を挙げて立ち上がります。レンはこちらに気付きましたが攻撃はしません。

「……よお」

ハチは声をかけました。

「ひさしぶりだね。ハチ」

「その調子はどうだ？」

「それ」とは無論P90のことです。

「すこぶる良いよ。良い仕事してるね」

もちろん、GGOでは店によって銃の性能が変わるなんてことはありません。気持ちの問題です。

「そうか、そいつは良かった」

ハチは髭面の男のそばに落ちていた麻袋を取りました。中には昆虫の複眼のようなものがいくつか入っていました。狩りの帰り道だったようです。ハチはそれをストレージに納めました。

「んじゃ、俺はこれで」

「はくい…… あっ！ちよつと待って！」

ん？とハチがキョトンとしてしていると、通知音が鳴りました。見るとレンからフレンド申請が届いていました。

「これでよし…… あれ？どしたの？」

フレンド申請を見て固まっているハチを見て首をかしげます。

「いや．．．なんでもない」

ハチはそう言っつてゆっくりとフレンド申請を許可しました。ハチのアカウントに二人目のフレンドが追加されました。ちなみに一人目はカイルです。

「んじや、俺行くな」

「は〜い」

今度は何も言われませんでした。

3章 University days

「先輩、男の子的にパンツとスカートどっちが良いの？」

「ミニスカ」

「・・・一応聞くけど、なんで？」

「女子大生の生足が見れるから」

「先輩・・・なんか胡散臭い」

「いや、絶対可愛いつて」

「聞く相手を間違えたよ」

そんな会話を聞きながら比企谷八幡は「麻婆茄子定食（麻婆茄子抜き）180円」を食べていました。ちなみにさっきの会話は二つ隣に座る冴えない系リア充とイマドキ女子の会話です。

「よっ！八幡！相変わらず目が死んでんな！」

そう言つて話しかけてきたのは、悪友とも呼ぶべき存在——相葉進一です。彼は八幡の正面に腰を下ろしました。「親子丼・大盛り（380円）」を手に持っています。

「・・・まあな」

八幡は自然と冴えない系リア充に目がいく。

「・・・青春を謳歌する者たちよ砕け散れ」

進一がそう呟きました。

「どうせ、そう思ってるんだろ？」

「・・・それじゃ、俺が僻んでるみたいじゃないか」

「違うのか？」

「違う」

八幡は断固として否定しました。

「まあ、なんだ。お前だっけ見てくれがワルいがわけじゃない。意外にモテると思うぞ。

その死んだ魚のような目を直せばな」

「DHA多そうだろ？」

「オレの女友達紹介しようか？」

「いらん。そもそもお前の女友達なんて、ほとんどがお前狙いのギャルじゃねえか」

相葉進一はかなりモテます。この大学の・・・少なくとも文系学部の女子のほとんど

が彼のことを知っています。

「まあな！モテる男はツライぜ！」

なのにカノジョが居ないので、我こそは！という女子が彼に告白をして、全て玉碎し

ている。

「・・・カノジヨか・・・」

八幡は眩き、彼の斜め後ろに目を向けました。そこには一人で「コロツケカレー（480円）」

「お？気になつちやう？あの八幡でもヤツパリ気になつちやう？」

進一が「こぞとばかり突っ込んできます。八幡はしばらく「そんなんじゃねえよB〇t」になることになりました。

「ただいま〜」

「おかえり、お兄ちゃん」

家に帰ると、妹の小町が既に帰っていました。

「お兄ちゃん。牛乳買ってきた？」

「あ、やべ。忘れた」

「ええ〜。昼にメールしたじゃん」

「悪い。すぐ買ってくるわ」

「いいよ。明日で」

どうせすぐ使わないし。と小町は言いました。

「なあ、小町」

「ん〜？」

「俺にカノジヨが出来たらどう思う？」

「・・・どしたの、お兄ちゃん？頭打った？」

まさか、そんな心配をされるとはお兄ちゃん思わなかったなあ。

「そうじゃねえけどよ・・・」

「そうだな〜」

じゃあ、良いよ。と言おうとしたタイミングで小町が口を開きました。

「もし、お兄ちゃんにカノジヨが出来たら、もちろんお兄ちゃんを応援するよ。妹として」

あ、今の小町的にポイント高いよ。つと最後に付け加えました。

「・・・」

「だから、もし小町に彼氏が出来たらお兄ちゃんも応援してね？」

「ふっ、妹はやらんぞ」

「じゃ、小町が勝手に出ていきます」

「なんなら、カノジヨでも連れてきたらどうだ？」

「なんでよ・・・」

「お前、意外に女子にモテそうな気がするから」

「そりゃ、小町が男っぽいつてことか…… まあ、否定はしないけど……」

「否定しないのか」

「だって実際にされてますし？」

「マジか」

「マジマジ」

冗談のつもりが本当だったらしい。我が妹ながら恐ろしい。

「それより、お兄ちゃん。ご飯」

「はいはい」

——こうして夜は更けていく。

”University days” closed.

to be continued next chapter.